

## 蜂起が成功をおさめるためには

### マルクス主義と蜂起 ロシア社会民主労働党中央委員会への手紙

支配的な「社会主義」諸党がおこなっているマルクス主義の歪曲のうちでも、もっとも悪意があり、おそらくもっともひろまっている歪曲の一つは、蜂起を準備すること、一般に蜂起を戦闘術として取りあつかうことは「ブランキ主義」である、と称する日和見主義的なうそである。

すでに日和見主義の首領ベルンシュタインが、マルクス主義をブランキ主義だと非難して悪評を博したものだが、現在の日和見主義者たちがブランキ主義についてさげすんでいるのは、そのじつ、ベルンシュタインの貧弱な「思想」をすこしでも改良したわけではなく、また「ゆたかにした」わけでもない。

蜂起を戦闘術として取りあつかうからといって、マルクス主義者をブランキ主義だと非難するとは！ マルクスこそ蜂起をまさに**戦闘術**と呼び、蜂起を戦闘術として取りあつかわなければならない、まず最初の成功を**かちとり**、敵にたいする**攻勢**を中断せずに、敵が狼狽しているのに乗じて、つぎからつぎへと成功をおさめながらすすまなければならない、等々と、この問題についてももっとも明確に、正確に、争う余地のない形で意見を述べた人であることは、マルクス主義者のだれ一人として否認しないであろうのに、これ以上にはなほだしい真実の歪曲がありうるだろうか？

蜂起が成功をおさめるためには、それは、陰謀や政党に依拠するのではなくて、先進的階級に依拠しなければならない。これが第一である。蜂起は、**人民の革命的高揚**に依拠しなければならない。これが第二である。蜂起は、成長しつつある革命の歴史のうちで人民の前衛の隊列の活動性がもっとも大きくなり、敵の隊列と、**弱く、中途半端で、不決断な革命の味方の隊列とのうち**で動揺がもっとも強まるような、転換点に依拠しなければならない。これが、第三である。蜂起の問題をとりあげるうえでのこの三つの条件の点で、**マルクス主義はブランキ主義と区別されるのである。**

しかし、いったんこれらの条件がそなわったときに、蜂起を**戦闘術**として取りあつかうことをこぼむのは、マルクス主義を裏切り、また革命を裏切ることである。

なぜ、ほかならぬいまの時機を、党が、客観的諸事件の経過によって**蜂起**が日程にのぼされたとみとめて、蜂起を戦闘術として取りあつかわなければならない、そうした瞬間であると考えるべきなのか、——このことを証明するには、比較の方法を利用し、七月三～四日と九月とをくらべることが、おそらくいちばんよいだろう。

七月三～四日には、真実に反することなしに、つぎのように問題を提起することができた。権力を掌握するほうが正しくはあるまいか、なぜなら、そうしないでも、どのみち敵は、われわれが蜂起をやるといって責め、われわれを蜂起者として懲罰するだろうから、と。けれども、その当時には、このことから、権力を掌握するほうがよいという結論を引き出すことはできなかった。なぜなら、その当時には、蜂起が勝利するための客観的諸条件がなかったからである。

(一) 革命の前衛である階級が、まだわれわれについていなかった。

われわれはまだ、両首都の労働者と兵士のあいだで多数を占めていなかった。いまでは、

両首都のソヴェトでわれわれは多数を占めている。この多数は、七月と八月の歴史によってのみ、ボリシェヴィキにたいする「懲罰」の経験と、コルニーロフ陰謀の経験とによってのみ、作りだされたのである。

(二) その当時には、全人民的な革命的高揚がなかった。いまでは、コルニーロフ陰謀があったおかげで、それがある。このことを証明しているのは、地方であり、多くの地点でソヴェトが権力を掌握したことである。

(三) その当時には、われわれの敵のあいだにも、中途半端な小ブルジョアジーのあいだにも、重大な一般政治的な規模の**動揺**はなかった。いまでは、動揺は巨大なものになっている。われわれの主要な敵である連合軍および世界の帝国主義——というのは、「連合軍」が世界帝国主義の先頭に立っているのだから——は、勝つまで戦いぬくか、それともロシアに反対して単独講和をむすぶか、この二つのあいだを**動揺しはじめた**。わが国の小ブルジョア民主主義者は、人民のなかで占めていた多数を明らかに失って、ひどく動揺しはじめ、カデットとのブロックすなわち連立を拒否した。

(四) だから、七月三～四日には蜂起するのはまちがいであっただろう。われわれは、物理的にも政治的にも、権力を維持することができなかつたであろう。ピーテルが一時われわれの手中にあったとはいえ、物理的に権力を維持することができなかつたであろう。なぜなら、その当時には、われわれの労働者と兵士は、ピーテルを占領するために**たたかおう**とは、また**死のう**とはしなかつたろうからである。それほどの「憤怒」はなかった。ケレンスキーにも、ツェレテリ＝チェルノフにも、それほどのにえたぎる憎悪が向けられてはいなかつた。われわれの仲間、エス・エルやメンシェヴィキまでいっしょになってボリシェヴィキを迫害するという経験によって、まだきたえられていなかった。

七月三～四日には、われわれは、政治的に権力を維持することができなかつたであろう。なぜなら、**コルニーロフ陰謀のおこるまえには**、軍隊や地方がピーテルに進撃してきかぬなかつたし、また進撃したろうからである。いまでは、状態はまったくちがっている。

革命の前衛、人民の前衛であり、大衆の心をひきつける能力をもつ**階級**の多数者が、われわれについている。

人民の**多数者**がわれわれについている、というのは、チェルノフの辞職は、農民がエス・エルのブロックからは（そして、エス・エルそのものからも）**土地をえられない**ということをしめす、唯一の前兆ではけっしてないが、そのもっともいちじるしい、もっとも明白な前兆だからである。これこそ、革命が全人民的な性格をもっているということの眼目である。

**帝国主義全体**も、メンシェヴィキとエス・エルのブロック全体も、未曾有の動揺に陥っているのに、われわれは、自分のすすむべき道をしっかりと知っている党であるという有利な地位にある。

われわれの**勝利は確実**である。なぜなら、人民はまったく絶望に瀕しているし、われわれこそ全人民に正しい活路をしめしているからである。すなわち、「コルニーロフ事件のとき」われわれは、われわれの指導の真価を全人民に明らかにし、ついでブロック派に妥協を提議したのに、**ブロック派のほうでこれを拒否した**のであって、しかも彼らはいっこうに動揺をやめていないのである。

われわれのおこたった妥協の提議はまだ拒否されたわけではないとか、民主主義会議が

まだこの提議をうけ入れるかもしれないとか考えるのは、このうえない誤りであろう。妥協は一つの**党**から他の**諸党**に提議されたのである。それ以外のやり方で提議することはできなかった。それを**諸党**が拒否したのである。民主主義会議は**協議会**にすぎず、それだけのものである。われわれはつぎの一事をわすれてはならない。それは、この会議には、革命的人民の**多数者**、慎激した貧農は代表者をだしていないということである。これは**人民の少数者**の会議である。——この明白な真実をわすれてはならない。もし民主主義会議を議会であるかのように取りあつかうなら、それは、われわれとしてこのうえない誤りであり、このうえない議会主義的クレティン病であろう。なぜなら、**たとえ**この会議がみずから議会であり、主権をもつ革命議会であると宣言したとしてさえ、やはりこの会議ではなにも**決定されない**からである。決定は**会議の外**でなされる。ピーテルとモスクワの労働者地区でなされるのである。

われわれには、蜂起が成功するための客観的前提がすべてそなわっている。われわれの状態は、異常に有利なものであって、蜂起でわれわれが勝利することだけが、人民をくるしめてきた動揺、この世でもっとも苦しいものであるこの動揺をおわらせることができるし、蜂起で**われわれ**が勝利することだけが、革命に敵対する単独講和あそびを**挫折させ**、しかも、もっと完全な、もっと公正な、もっと間近な講和、革命に**有利な**講和を公然と提議することによって、それを挫折させることができるという状態である。

最後に、わが党だけが、蜂起に勝利をおさめたのち、ピーテルをすくうことができる。なぜなら、もしわれわれの講和提議が拒否されて、休戦さえ得られないとすれば、そのときには、**われわれ**は「祖国防衛論者」となり、**好戦諸党派の先頭**に立ち、**もっとも「好戦的な」**党となり、真に革命的なやり方で戦争を遂行するだろうからである。われわれは、資本家からありったけのパンとありったけの長靴を取りあげよう。彼らにはパンの皮をのこしてやり、木皮靴をはかせよう。パンと靴は、みな戦線におくろう。

こうして、そのときには、われわれはピーテルをまもりぬくであろう。

ロシアには、真に革命的な戦争をやるための資源は、物質的なものも精神的なものも、まだ無限に大きなものがある。ドイツ人は、九分九厘まで、すくなくとも休戦をわれわれにあたえるであろう。ところで、いま休戦を勝ち取ることは、全世界に勝利することを意味する。

第 26 卷『マルクス主義と蜂起』P7~11

1917 年 9 月 13~14 (26~27) 日に執筆

## ポイント

①蜂起が成功をおさめるためには、それは、陰謀や政党に依拠するのではなくて、先進的階級に依拠しなければならない。②蜂起は、人民の革命的高揚に依拠しなければならない。③蜂起は、成長しつつある革命の歴史のうちで人民の前衛の隊列の活動性がもっとも大きくなり、敵の隊列と、弱く、中途半端で、不決断な革命の味方の隊列とのうちで動揺がもっとも強まるような、転換点に依拠しなければならない。

蜂起の問題をとりあげるうえでのこの三つの条件の点で、マルクス主義はブランキ主義と区別される。

われわれの勝利は確実である。なぜなら、帝国主義全体も、メンシェヴィキとエス・エ

ルのブロック全体も、未曾有の動揺に陥っており、人民はまったく絶望に瀕しているが、われわれは、自分のすすむべき道をしっかりと知っている党であるという有利な地位にあり、われわれこそ全人民に正しい活路をしめしているからである。

### 蜂起を提起する条件

もし革命党が、革命的諸階級の先進部隊のなかでも、また全国を通じて、多数者を獲得していないなら、蜂起などということは問題とならない。そのうえ、蜂起のためにはつぎのことが必要である。(一) 全国的規模で革命が成熟していること。(二) 旧政府、たとえば「連立」政府が、精神的・政治的に完全に破産していること。(三) すべての中間分子、すなわち、きのうまでは政府を完全に支持していたが、いまは政府をかならずしも完全には支持していない人々の陣営に、大きな動揺がおこっていること。

第 26 卷『ボリシェヴィキは国家権力を維持できるか?』P127

1917 年 10 月 1 日

### 戦闘術としての蜂起の主要なポイント

マルクスは、この戦闘術の主要な規則のうちで、つぎのものをあげている。

(一) けっして蜂起をもてあそんではならない。蜂起を開始したら、最後までやりぬかなければならないことを、しっかりと知っていなければならない。

(二) 決定的な地点に、また決定的な瞬間に、きわめて優勢な兵力を集結しなければならない。さもないと、準備と組織の点で味方にまさっている敵は、蜂起軍を粉砕するだろうからである。

(三) いったん蜂起を開始したなら、最大の決意をもって行動し、かならず、無条件に、攻勢をとらなければならない。「守勢は武装蜂起の死である」。

(四) 敵の不意をうつようにつとめ、敵の軍勢が分散しているあいだに好機をつかまなければならない。

(五) ぜひとも「士気の優越」をたもちつつ、どんな小さい成功でも、日々に（一つの都市の場合だったら、刻々に、といってもよいであろう）成功をかちとらなければならない。

マルクスは、武装蜂起についてのすべての革命の教訓を、「歴史上最大の革命的戦術の大家ダントンの『大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ!』』という言葉にまとめている〔第四巻、148 ページ〕。

第 26 卷『一局外者の助言』P178

1917 年 10 月 8(21)日に執筆